

「人権レーダー」の企画・取材を通して見えてきたもの

いまみち あきら
今道 彰 (株) 毎日放送 ラジオ局報道部記者



「こんな人生、二度と要らん」

68歳の女性は、インタビューの最後をこう締めくくった。それまで明るい口調だったのが、この時ばかりは語気が強くなった。

彼女は被差別部落の出身。「半生を聞かせて欲しい」と何度かお願いした末、やっとインタビューに応じてくれ、貧しさを極めた少女時代や、教師にまで差別された小学校での日々。生活苦に耐えられず母親に浴びせた心無い言葉への後悔など、多くの辛い体験をまるで笑い飛ばすかのように語ってくれた。

現在は小学校の給食調理員として働き、子ども達との交流を楽しんでいるという。

彼女の話聞きながら私は心の中で「人生捨てたものじゃない、なんて今は思っているのかな」と分析していた。

そこに、彼女の最後の言葉が鋭く突き刺さってきた。傷ついた心は、簡単には癒えない。言葉が見つからなかった私は、ただ苦笑するしかなかった。

ラジオ番組「人権レーダー」の、取材の1コマである。

本音で語り合う

「人権レーダー」は、毎日放送ラジオの夕方4時から番組「MBSニュースワイド・アングル」の中にある10分間のコーナーだ。大阪府など近畿の自治体による提供で95年に始まり、今年で10年目、放送

回数は1100回を超えた。内容を一言でいえば、人権に関する問題について取材し、録音したインタビューを流しながら問題点などを報告するというもの。差別に苦しむ当事者をスタジオに招いて生で話を聞くこともある。

コーナーがスタートする時、私は「人権って、なんか面倒だなあ」と腰が引けていた。しかし、以前に人権関連のイベントなどを取材した経験を思い出し、「なんとかなるだろう」と安易に担当を引き受けたのだ。が、3回目の取材でその甘さを思い知る。

知的障害児の施設でのこと、子どもたちを前にしておじけづいてしまい、取材ができなかった。潜んでいた差別心が一気に噴き出した瞬間だった。

その後の取材でも、かつて自分が伝えていた、うわべだけの人権とはかけ離れた現実が幾つもあった。冒頭で紹介した女性のこともその1例だ。私は自分の浅はかさに呆れ、自信を失っていった。

そんなある日、人権活動をしている人が私にこう言った。

「人間って他人を傷つけるし差別もする、私もそう、そういう弱い存在なんや、それを認めた上で人権を語らないと意味が無い、お互い本音で語り合おう。」この言葉を聞いて、肩の力がスッと抜ける感じがした。厳しい体験で、人間のいい面も悪い面も知り尽くしたがゆえの包容力だろうか、こんな私を有りのままに受け入れてくれる雰囲気、そこにはあった。この時、「本音で語り合える、こんな場所がもっとあればいいな」と切実に感じた。

「知る」ことは、体感すること

人権関連の取材では、「まず当事者のことを知ることが大切」だとよく聞く。人権レーダーを通じて多く

の人と出会ううち、「知る」というのは、知識を得ることではなく、体感することだと感じた。

実際に会って話を聞くと、言葉の裏の思いが伝わってくるのが少なくない。特にここ数年、子ども達の取材をする機会が多くなって、より、そのことを実感している。

虐待されても必死で親をかばう小学生。

高校に入学したものの、被差別部落出身であることがバレないかと怯える女子生徒。

父親のリストラが原因で崩壊寸前となった夫婦仲をなんとか繋ぎとめようと頑張る子ども。

彼らの本当の気持ちは、彼らに接してみないと分からない。

社会のゆがみを必死で受け止めようとしているその姿は、正義感のない私でさえ、早く何とかしなければと思う。

人権を考えるのは自分のため

「人権って、何のために考えなあかんの？」

人権リーダーが始まった頃は、心の奥でよく自問していた。しかし今ならこう答える、「自分のため」。

ストレスがたまった現在の社会では、思いも寄らないことで理不尽な扱いを受けることもある。

そんな世界は、常に緊張していなければならない。

そうではなくて、自分の弱いところをさらけ出しながら本音で語れる環境……他の人と違う所があっても互いに認め合える環境がいっぱいあれば、思いっきり深呼吸して生きていけるのではないかな。

自分や我が子が将来、半生を振り返るときに、「こんな人生、二度と^い要らん」なんて思うことのないよう、人権リーダーはこれからも続けていきたい。

用語解説

【槇坪 多鶴子（まきつぼ・たづこ）さん】

映画監督・企画制作パオ（有）代表取締役

2000年公開の「老親 ろうしん」が全国的に話題を呼びました。リウマチのため車いすでメガホンをとり、車いすを押すのは、自身の老親、87歳のしかも痴呆症の母親。介護しあう母子の姿がそこにはあります。自身の体験も重ね合わせた「母のいる場所」（2003年度作品）は、現在、各地で上映会が開かれ、介護の選択と家族それぞれの自立を考える話題作として、反響を呼んでいます。

パオHP >> <http://www.pao-jp.com/>

【老親 ろうしん】

～女が結婚するとふつう親が4人になる～

「介護で力尽きる前に自分を生きたい。」

「老いるとは、新しい自分に出会い続けること…」

老親介護の生活を描く中で、性別役割分担や女性の生き方を問い直して高齢者の自立を見つめています。オトノサマで生きてきた舅が、妻の死後、一家の主夫に大変身。元嫁母子を支える生活に生きがいを見出ししていきます。孫娘の「おじいちゃんはゆっくり成長するタイプ」という発想は介護の問題に悩む主人公の生き方をユーモラスに描いています。

【母のいる場所】

～母の介護をめぐる起こる主人公と父親の葛藤～

「酒、タバコ、外泊、恋愛の自由」が保障されている老人ホームとの出会い。

母は笑顔を取り戻し、そこが「母の居場所」に…

人は誰でも老いを迎え、病気や障害を抱えたり、不安と孤独から痴呆になったりする可能性があります。介護する人される人、それぞれの自立とは？ 介護とは？ ふさわしい最後の居場所はどこなのか？ 夫婦のあり方や親子関係を見つめ直すきっかけになる作品です。

【人権リーダー】

近畿の自治体が広域的・効果的な人権啓発のために提供している啓発ラジオ番組です。

毎週金曜日の夕刻、毎日放送の「MBSニュースワイド アングル」の中のコーナーで、さまざまな人権問題をテーマにタイムリーで身近な話題をわかりやすく語りかけています。

毎回リスナーからの反響が数多く寄せられています。シリーズ「私の人権体験記」と題してエッセイを募集した際には、幅広い年齢層の方からの応募が多数あり、近畿における広域的な人権啓発番組として定着しています。